

## 伊勢物語古注釈の方法

## ——各小段の「女」の実名を中心に——

飯塚 恵理人

## 一 はじめに

伊勢物語の解釈が鎌倉期・南北朝期に二条家・冷泉家といった和歌の家の人々によって講釈の形で師匠から弟子に伝えられ、それが常に「秘伝」として他に教えないと言う誓約書つきで行われたことは、今日広く知られている。それらの講釈の内容が知られるものが、『和歌知頭集』<sup>1</sup>（書陵部本。以下「知頭集」と略称）であるとか、『冷泉家流伊勢物語抄』<sup>2</sup>（以下「冷泉抄」と略称）といった「古注釈」と言われるものである。そして、これらの古注釈については、片桐洋一氏が<sup>3</sup>

冷泉家流伊勢物語古注の一般について論じて来たのであるが、（中略）、これらは秘伝として師からその弟子に伝えられて来たために、現存する物のすべてが師の講義用ノートか弟子の講義聴講ノートであって、定本という物が存在しない。

と、定本というものが無いと述べておられる。

古注釈が、制作された当時、「師匠」によって語る説を纏めた講義ノート、もしくは語られた説を書き留めた講義聴講ノートという性格を持っていたとすれば、講義の内容が師匠のレベル・弟子のレベル・講義時間等によって変わらざるを得ない以上、定本が存在しないのは当然のこととなる。であるならば、これらの古注釈を博搜してそれぞれの古注釈にどのような説が載るのかを比較検討することも無論大切な仕事ではあるが、これ

らの古注釈の説の相違が出る根本でもある、古注釈の伊勢物語の理解の方法について検討をする必要があるだろう。

本稿では、「知頭集」「冷泉抄」を取り上げ、これらの古注釈が伊勢物語の各小段の「女」を誰と理解したかを調査する。そして、それらの「女」の名前がなぜ宛てられたのかを検討し、その実名を宛てる方法の吟味から、古注釈の伊勢物語の理解の方法について考察したい。

## 二 伊勢物語に描かれたとされる十二人

片桐氏は、この古注釈の伊勢物語把握を「作中人物に実在人物の名をあてて読む読み方、そして特に歴史的事実としての『真相』を『仮相』の形において表現したものが物語であるという把握のしかた」と言われる。そして

彼らにとつては、伊勢物語は物語ではあるけれども、その物語はあくまでも現実の在原業平をめぐる世界を虚構化し、物語化したものもほかならないのである。（中略）つまり、物語の仮構や虚構というのは、実際に存在した人物の事績を「名をかへ、さまをかへて」記すゆえに仮構や虚構であるわけで、これを注釈する者は、その本質を見透して「名をかへ、さまをかへ」たものを現実社会における歴史的事実として読者の前に顕示しなければならないという態度が、この知頭集を始めとする鎌倉時代の勢語注釈書の大半を貫いていると言いつつよいかと思うのである。

と言われる。

伊勢物語の古注釈の特徴として、業平が妻にしたとする女性の人数が非常に多い事と、その人物名が実名で記載されているという点がある。まず、「知頭集」は、

されば、えたるどころの女、三千七百三十三人也といへども、きく人みちにふけりぬべき女ばかりをえらんで、わづかに十二人を、このものがたりにはあらはしききたる也。

と業平の妻の人数を三千七百三十三人とし、このうち十二人の女性が伊勢物語に書かれているというのである。その十二人の実名を記すと（人名の前の番号は飯塚が私に記した。）

- ① 第一二ハ雅楽のかみ紀有常がむすめ。
- ② 第二二ハ忠仁公のむすめ、文徳天皇の後、そめ殿の後也。
- ③ 第三二ハ出羽郡司小野のよしざねがむすめ、小野小町也。
- ④ 第四二ハ閑院左大臣冬嗣のむすめ、仁明天皇の後、五条后也。
- ⑤ 第五二ハ中納言ながらのむすめ、清和天皇の後、二条の後也。
- ⑥ 第六二ハ中納言長谷雄卿のいもうと、恋じにの女也。
- ⑦ 第七二ハ文徳天皇の御むすめ、恬子、伊勢斎宮也。
- ⑧ 第八二ハつくしのそめがはの女、これには名なし。
- ⑨ 第九二ハ中納言行平のむすめ、清和天皇の更衣、貞教親王の御母也。
- ⑩ 第十二ハ大納言登卿のむすめ、めづらしのまへ也。
- ⑪ 第十一二ハ周防守在原仲平のむすめ、やしなひいもうと也。
- ⑫ 第十二二ハ大和守藤原継蔭がむすめ、いまの妻女伊勢にありけるを、伊勢ぬきいだして、そのあとに⑬后宮の上童ましこのまへをいれたる也。

この十二人の女の、名をかへ、さまをかへて、このものがたりの中二、八十余段にみだれちりたるなり。

となる。十二人とあるが、「伊勢」のことを抜き出して、その代わりに入れた「ましこの前」を含めると実名としては十三人の名が挙げられている。

一方、「冷泉抄」の冒頭にも業平の妻の名が書かれているが、これを挙げると（人名の前の番号は飯塚が私に記した。）

凡、業平一期会所女、三千七百三十三人也。其中に、此物語には、唯十二人をえらび入たる也。其十二人とは、

- ① 一、紀有常女 有常加賀守 忠仁公姪也。号染殿内侍。母中宮大夫藤原良門娘。
- ② 二、染殿后 明子、文徳天皇后。忠仁公娘也。
- ③ 三、小野小町 出羽郡司小野良実娘、業平廿、小町三十九にて逢也。
- ④ 四、五条后 順子、仁明天皇后。閑院左大臣冬嗣娘也。
- ⑤ 五、二条后 高子、清和后。中納言長良娘也。
- ⑥ 六、長谷雄卿妹、長谷雄中納言 業平を恋ていまだ逢ずして死也。
- ⑦ 七、伊勢斎宮 恬子、文徳二御女、惟高妹、清和姉也。母三（条）町静子、なとら娘也。
- ⑧ 八、筑紫染川女、定文妹。
- ⑨ 九、中納言行平女 行平は阿保親王子、業平兄也。
- ⑩ 十、大納言源昇卿女、寵メヅラシノ前トモ、テウトモ 昇は嵯峨天皇之子也。孫共。
- ⑪ 十一、周防守在原中平女 阿保親王子、業平兄也。
- ⑫ 十二、大和守藤原継蔭女、いせ、宇多御門のかういになる。業平に嫁て後也。
- ⑬ 后宮のうへ童まし此前を入たり。

此十二人をえらび入事、皆以謂有可尋也。後に伊勢我が事を除て、

となり、業平の關係した女性の人数も、伊勢物語に書き留められたとする実名も「知頭集」と全く同じなのである。

それでは、実際に、「知頭集」「冷泉抄」がどの小段の「女」をこれらの

女性に宛てているのかを示すと以下のようなになる。「知頭集」は巻第六に各小段の「女」を列記している。その部分の記述によった。また段の数字が（ ）で囲んであるものは、その注釈書が、その段の話の内容は「つくり事」であるが、歌はこの人物の詠んだものとするものである。これもその人物が関係する小段の数字としては含んで数えている。）

①紀有常女

知頭集 全一五段―1、10、17、18、19、20、21、22、24、31、

39、41、44、50、107

冷泉抄 全一七段―1、10、13、17、19、20、21、23、24、33、

39、40、41、43、44、86、103

②染殿后

知頭集 全一九段―2、(15)、30、32、34、47、54、56、57、64、

73、74、80、89、90、93、103、105、120

冷泉抄 全一四段―4、5、6、19、30、35、54、55、65、69、

90、100、118、122

③小野小町

知頭集 全八段―25、28、37、42、43、63、(115)、122

冷泉抄 全一三段―18、21、25、28、32、37、42、50、60、62、

103、108、113

④五条后

知頭集 全五段―26、27、100、111、118

冷泉抄 なし

⑤二条后

知頭集 全一八段―3、4、5、6、9、12、13、29、35、36、

55、65、76、86、92、95、96、100

冷泉抄 全三五段―2、3、4、5、6、9、12、14、15、26、

27、29、30、31、35、47、53、55、56、64、65、73、74、76、

89、92、93、96、105、110、115、118、119、123

⑥長谷雄卿妹

知頭集 全一段―45 (45を異本の島原文庫本『和歌知頭集』は二

条后とする。)

冷泉抄 なし (前書の部分では長谷雄卿妹を「恋死に」の女として

いるが、本文では「良相女」としている。)

⑦斎宮

知頭集 全七段―53、58、69、71、72、75、

冷泉抄 全六段―69、72、73、75、102、104

⑧染川女

知頭集 全一段―61 (名なし)

冷泉抄 全一段―61 (定文女)

⑨行平女 (四条后)

知頭集 全二段―52、94

冷泉抄 全六段―13、34、36、116、120、122

⑩めづらしのまへ (昇女)

知頭集 全三段―33 (てうの前)、87、99 (うつく)

冷泉抄 なし

⑪仲平女

知頭集 全一段―40 (業平養妹)

冷泉抄 なし

⑫伊勢 (冷泉抄では、「杉子・杉子前」)

知頭集 なし

冷泉抄 全七段—31、43、69、70、71、95、103

⑬ましこのまへ

知頭集 全一段—62

冷泉抄 なし

となる。ここで注目されることは、「知頭集」「冷泉抄」ともに、この十二人のうちに全く小段に宛てられていない人物がいることである。「知頭集」では、⑫伊勢を宛てる小段がない。島原文庫本『和歌知頭集』は伊勢の幼名を「よひとの前」とし、69段の「小さき童」がそれに当たるとする。また「冷泉抄」では、④五条后⑥長谷雄卿妹⑩めづらしのまへ⑪仲平女⑬ましこのまへについて、その人物を宛てる小段が存在しない。この点で、「知頭集」「冷泉抄」ともに冒頭の名前と実際の小段で挙げられる名前との間に内部矛盾があるのである。

### 三 伊勢物語業平自作説とその矛盾克服

鎌倉時代の注釈書は「知頭集」「冷泉抄」ともに、伊勢物語を在原業平本人の作であるとす。しかしながら、このようにとると矛盾する点が出てくる。最大の矛盾は伊勢物語中の小段に業平の死後のことが書かれていた点である。また、業平の誕生以前に詠まれた万葉集に採られている古歌を、「男」「女」が詠んだとしている小段もある。また死後のことだけでなく、業平の辞世の句(125段)が入っていることは業平自作ということと矛盾する。以下、古注釈が、このような矛盾点をどのように説明しようとしたか見て行きたい。

まず「知頭集」は、物語の作者と、伊勢物語の内容について、

在五中将業平朝臣、自、ふるまひたりし事をむねとして、ふるきものがたりをまじへてかきおきたりし物語也。

と、業平が、自らのことに故事を加えて書き記したものとす。このことによつて、伊勢物語に万葉集の歌が入っていることは説明できる。さらに、業平の死後のことが伊勢物語に入っていることについて、

このものがたりのうちに、業平死後の事おほくいりたり。(中略 芹河行幸)伊勢物語の最大事と申は、次第の前後とて、かやうの事也。

と、業平自筆と矛盾することを認めている。そしてこの矛盾の生じた理由を、業平の妻であった伊勢が、業平死後の事を記して伊勢物語に入れたとすることによつて説明しようとする。そして、その際には、

おほくこの物語に、伊勢が事をいれたり。あやしく、男女のあひ思たる事をのみかきたりければ、時しもあれ、御門の御めぐみふかゝりければ、まばゆくびんあしくおぼえて、(中略)そのなかに我事かきたるところをば、ぬきいだして、それにさにたるものがたりをかきかへくとして、おのれが事をば、ひとつもいれずして、寛平三年に世にふす。(中略)かくおのれが事をぬきかへて、かきたりし(かば、これらも)伊勢がふでのうちに、かのせりかはの行幸はいりたる也。これのみならず、業平以後の物語のあまたいりて侍るは、この伊勢がふでにて侍るなるべし。

と、自分が現在、帝の寵愛を受けていて具合が悪いことから、業平が伊勢との関係を書いた部分を抜いて、似た物語を作つて差し替え、その時に業平死後の事も入れたとすのである。そして、その伊勢の書いた小段は全部で一八段であるとする。この内訳は、

伊勢が事かきたりける所は、十六だんありければ、やがてそのかはりも十六だん侍り。そのほかさらになれたる物語二あり。

と伊勢自身のこと書かれていた一六段分と、業平の死に関する段(124・125段)の合計一八段であると言う。このことは、

このみちのうつはものたる人の、なき事をかなしみ思て、おもふ事はぞたゞにやみぬべきといふ哥をよみたりしと、又、すでに、けふのいぬの時ばかりにしぬべしと思ひさだめてければ、その日のゆふぐれがたに、ついにゆくみちとはかねてきしかどいふ哥をよみたりしと、二だんは、やまひの床にして、のちの事なりければ、伊勢物語には、かゞざりけるを、伊勢がのちにかきくはへて、家集にもいれたるなるべし。

と書かれる。

一方、「冷泉抄」も、業平死後の小段があること、伊勢物語には伊勢が書き直した部分があるとす。それは伊勢物語という題が付けられている説明の部分で

業平伊勢を妻としたりし時、伊勢物語の草案をして書たりしを、業平滅後に宇多院より召されければ奉之。秘事を書たる事のおまた有しを、かたはらいたがりて万葉の冊をぬきかへて十七段のかへ物とす。

とあることにより知られる。「冷泉抄」は伊勢の事が書かれていたため書き換えられた小段を一七段とするが、伊勢の書き換えた小段があるとする点で、これらの二系統の注釈書は共通しているのである。

それでは、「知頭集」「冷泉抄」は、それぞれどのような方針で各小段の人名を宛てていったのであろうか。我々が「研究」という立場ですぐ考えつくのは、平安期に成立した勅撰集・私撰集や物語などの資料に伊勢物語のその小段と同じ和歌が載り、そこに実名が記されている場合があればそこから比定する方法である。このような方法を仮に伊勢物語の古注釈にあてはめた場合、はたして妥当性が認められるであろうか。以下、その過程について述べる。

まず問題となるのは、伊勢物語を業平の一代記として読むことができる

かという問題である。この場合、その小段の和歌が実際に業平作であるかよりも、古注釈の作られた南北朝期までにおいて、その和歌が業平作と認められていたかどうかの方が重要であろう。そこで他の物語・歌集が業平詠としている歌を含むか否かで小段を分類した。なお『新古今和歌集』は平安期に分類した。また南北朝期の勅撰集は『新後拾遺和歌集』までとした。

①平安期（全四四段）――1、2、3、4、5、6、7、8、9、

17、19、21、25、29、41、42、44、45、46、47、48、49、51、59、60、61、65、66、69、70、76、77、80、82、84、87、88、97、99、103、106、107、123、125

②鎌倉・南北朝（全二二段）――10、15、16、20、22、34、40、50、53、55、56、64、71、75、81、83、92、96、100、101、124

③南北朝期までに成立した他作品に業平詠として記載されない（全六〇段）――11、12、13、14、18、23、24、26、27、28、30、31、32、33、35、36、37、38、39、43、52、54、57、58、62、63、67、68、72、73、74、78、79、85、86、89、90、91、93、94、95、98、102、104、105、108、109、110、111、112、113、114、115、116、117、118、119、120、121、122

となる。南北朝期までに業平の歌と考えられていた歌を含む小段が伊勢物語の約半数であることを考えれば、古注釈成立期の人が伊勢物語を業平の一代記と考えてもそれほど不自然ではない。

一方、伊勢物語の中に恋愛関係に関する小段はいくつあるだろうか。恋愛関係以外を扱った小段を挙げると、

11、16、38、39、44、46、48、51、59、66、67、68、77、80、81、82、83、84、85、87、88、91、97、98、101、106、109、114、117

と全三二段である。第7段から第9段の業平の東下りの記事は、旅の記事ではあるが、都に残した女性を思う内容の歌が中心となっており、業平がこの歌を詠んで慕った女性が誰であるかということが古注釈で問題になるので恋愛関係の小段として扱った。また、17段は桜の時期に人が訪れたという内容で、訪れた人が異性でなくとも物語が成り立つが、古注釈では恋愛関係にある人と理解しているので、これも恋愛関係の小段として扱った。このように考えると全一・二五段のうち、九三段は恋愛関係であると認められる。

「知頭集」は「八十余段」に「十二人」の女性のことが書かれていたとするが、恋愛関係が書かれている九三段から「十二人」の女性について書かれた「八十余段」を除いた小段には誰の恋愛関係について書かれていると判断していたのが問題となる。この部分は、業平が「昔のこと」を書いた小段があったと考えていたとるのが自然であろう。伊勢物語の小段の中で、業平在世中よりも確実に古い時代に成立した万葉集の歌を含む小段を見ると、14、23、24、33、35、36、37、71、73、74、87、116の全一二段である。そして「知頭集」は、23、60、112、116の四段を「ふるき世」「むかし」「万葉の女」「万葉」のこととする。23・116段を業平以前のひととするのは万葉集の歌を含むという理由が考えられる。「知頭集」が60段・112段を業平以前のひととする理由は不明である。ただ「知頭集」ではそれらの全四段の記述において、伊勢物語に業平以前のことが書かれているという立場をとっていると言える。一方、「冷泉抄」には、その内容が業平以前のひとであるとする小段がない。このことから、「冷泉抄」の基となる注釈でも、ある時代までは伊勢物語は業平が昔のことを混ぜて書いている部分があると考えられていたものが、小段の解釈が繰り返される

につれ、だんだんと業平以前のことが書かれていると考えられる小段が減って行ったという解釈が成り立つだろう。「知頭集」の基となる注釈でも、業平以前のひととする小段は、四段よりも多かつた可能性がある。

次に、古注釈が伊勢の書き入れとしている小段は何段あるだろうか。「知頭集」では伊勢が自らのことを書いていた一六段分と、業平最期の記事二段分を書いたとする。しかしながら、「知頭集」が伊勢自身のこととする小段は69段のみであり、ましこの前のこととするのも、62段のみである。またそれ以外に「つくり事」とするのは14、15、108、115の四段である。

61段は「ぬしなし」とするので、この合計七段は伊勢が作り事を入れて作った小段と理解していたと考えて説明できる。ただ芹河行幸・業平最期の段を含めたとしても九段であり、一六段には届かない。一方「冷泉抄」では伊勢自身のことを書いた小段として31、43、69、70、71、95、103の七段を挙げ、業平死後・死去に関する三段を含めて全一〇段が伊勢書き入れの小段であると理解していると考えられる。しかしながら、それとしても「冷泉抄」の冒頭に述べている計一七段よりは、はるかに少ないのである。

#### 四 古注釈が「女」に実名を宛てる方法

伊勢物語の女にモデルがいるとしたならば、現在の我々はそのモデルをどのように推定するであろうか。「知頭集」「冷泉抄」が業平の妻と考える十二人の女性について考えて行きたい。まずこれらの女性のうち、古注釈を作成した人々が業平の妻と考えるのに最も自然な人物は、「男」（業平）と関係があったと伊勢物語の本文中に書かれている女性であろう。この条件に該当する人物は⑤二条后⑦斎宮恬子⑧行平女四条后の三人である。⑤二条后は、6段に「二条の後のいとこの女御の御もとに、仕うまつるや

うにてみ給へりけるを」と書かれている。次に⑦齋宮恬子は、69段に「齋宮は水のおの御時、文徳天皇の御むすめ、惟番の親王の妹。」と書かれている。⑧行平女四条后は79段に「これは貞教の親王、時の人、中将の子となんいひける。兄の中納言行平のむすめの腹なり。」とある。

次に、当時の人がその小段の「男」「女」と考えて不自然でないと思われるのは、伊勢物語中の和歌が他の歌集・物語に記載されている場合、それらの歌集・物語においてその歌の作者であると記載されている人物であろう。これに該当するのは、①有常女②小野小町③伊勢の三人である。①有常女は19段の、②小野小町は25段の和歌の作者として『古今和歌集』に載る。また③伊勢は58・60段の和歌の作者として『古今和歌六帖』に載る。

逆に、十二人の業平の妻とされていない人物の和歌で、伊勢物語に載せられているものもある。65段の和歌は『古今和歌集』に藤原直子の歌として載る。但し「冷泉抄」は藤原直子を二条后(高子)の別名としている。

また、伊勢物語以外の物語において、業平と夫婦であったとされる女性もいる。例えば『大和物語』の160段は、業平が染殿内侍に衣を仕立てさせた話である。但し、この染殿内侍を「冷泉抄」の冒頭では有常女の別名とする。これは別の人物の話であったものが、両方とも業平の妻であると言う話の共通点から同一人物とされてしまった例であろう。また『大和物語』の165段では、「水の尾の帝の御時、左大弁のむすめ、弁の宮さん所とていますかりけるを、帝御ぐしおろしたまうて後にひとりいますかりけるを、在中将しのびてかよひけり。」と業平が弁御息所に通ったという記事が載る。

以上は平安期に成立した物語に関して見た結果であるが鎌倉期に成立したもので含めると、④五条后⑤伊勢については、業平との恋愛に関する

説話が確認できる。まず、④五条后については、『宝物集』に「五条ノ后ハ(中略)業平ノ中将ニ値給テケリ。サモトテハニアイタル御年ノ程カハ。后ハ四十二。中将ハ二十五ト申タルメル。」と載る。また⑤伊勢については『西公談抄』が「三輪の山いかにまぢみむ年ふとも尋ぬる人もあらじと思へば」という和歌の作歌事情を「此の歌(は)、業平中将かれぐになりければ、伊勢が父の大和守がもとに行くとして」という形で述べている。鎌倉時代成立のものに業平の妻として実名が挙げられる女性は、古注釈と同時代の説話の世界でもそのような人物の理解がなされていたと言う事ができるだろう。

一方、伊勢物語の和歌や本文の中にその人物の名前が隠されていると考えた例もある。これはいずれも「男」が「狩の使」として伊勢に下った小段に関連する。伊勢物語では、齋宮の下仕えの女性として、69段の齋宮が「男」のもとを訪れる時に先に立てた「小さき童」と、70段の「男」が大淀のわたりで「みるめかる」の歌を言いかけた「わらはべ」が登場する。71段の歌の贈答をした「好き事」を言う女は、齋宮本人とも、齋宮の下仕えとも読むことが出来る。「知頭集」「冷泉抄」ともに齋宮の下仕えの女性を「喚戸(よひと)」「杉子」という二名として実名を宛てる。そして「知頭集」では「喚戸」を「冷泉抄」では「杉子」をそれぞれ伊勢の幼名であるとする。まず「知頭集」の69段の部分を用いると、

ちぬさきわらはとは、うへ童なり。これは大和守継景、その時は伊勢のかみにて、いつきの宮のかみかけて侍ける。それがむすめ、七より齋宮につかうまつる、よひとのまへと申けり。のちには伊勢と申。(中略)此(時)年九也。

と、伊勢守を継景とし、幼少の伊勢がその上童であったとする。一方「冷泉抄」を引用すると、

○ちいさきわらはといふは、斎宮には二人の少女をつかひ給ふ也。一人をは喚戸の前と云。是は斎宮出入の時御戸を開閉職をする故に喚人と云。杉子は伊勢がおさなくての事なり。是をぐして座す也。彼伊勢は終に業平が思ひ物にて有けるなり。かのしよくは女のいまだ男せぬがする也。喚人は大和守平豊名が娘也。一人は杉子と云。杉の葉にもりて供を大神宮に手向奉るなり。すぎ子と云は、伊勢守藤原のつきかけが娘也。後に伊勢とて業平さいごまでのつま也。

となる。「冷泉抄」はこの二人の名前の由来を、「喚戸」は戸の開閉、「杉子」は杉を用いて供を運ぶと、ともに職掌からつけられたと説明している。「知頭集」にはこの名前の由来は記されていない。ただ、「喚戸」「杉子」という語自体は、これら斎宮関係の小段に含まれているのである。まず「喚戸」の語は、「斎宮なる女」に逢った翌朝、その女に業平が送った「かきくらす心の間にまどひにき夢うつつとは世人定めよ」の「世人定めよ」にある。この和歌の「世人定めよ」の部分には異同があり、本稿で用いた伊勢物語の底本は「こよひ定めよ」とする。この部分を「世人」とするのは伊勢物語の七海本・建仁二年本（一説よひと）などである。また本稿が用いた『古今和歌集』の底本も「世人定めよ」とする。この「世人」は現在の解釈では「世間の人」となる。しかし常識的に考えたならば、世間の人が翌朝にこの密通事件を知り、それが夢か現実であるかを判断すると言う事はない。伊勢物語の中でこの密通事件を確実に知っていた人物として描かれるのは、斎宮なる人が「男」のもとを訪れる際に先に立てていた「小さき童」である。「知頭集」「冷泉抄」の基となった注釈では、そこからこの「世人」を、唯一真実を知る立場にあり「夢か現か」を定める事のできたはずの童の名と理解したのではなからうか。つぎに「杉子」の名は、71段の「かの宮にすぎこといひける女」に由来するように思う。「す

きこといひける女」は、現在の理解では「好き事」（恋愛に関する事）を言った女となるが、これを「知頭集」「冷泉抄」の基となった注釈は、『杉子』という女」と「すぎこ」を固有名詞と理解したと考えられる。

さらに、古注釈が業平の妻と理解した女性には、伊勢物語に和歌が載っていないとしても、他の物語などで「歌人」として登場する人物がある。たとえば、⑩昇大納言女は『大和物語』の140段に登場する。この段では、「故兵部卿の宮、昇の大納言のむすめにすみ給ひけるを」という形で書かれ、業平との関係は書かれていない。⑩昇大納言女は、「冷泉抄」の冒頭では「籠　メツラシノ前トモ、テウトモ」と載る。この「籠（うつく）」は『古今和歌集』の376番、640番、742番の作者である。業平との関係はこれらの詞書にはない。また籠が昇の娘であったかどうかは疑問である。小沢正夫氏は、籠について、「大納言源定の孫、大和守源精の娘という。」とされている。これも『大和物語』に歌人として書かれている昇大納言娘と、勅撰歌人でありながら履歴がはっきりしているわけではない籠を同一人物として捉えたと言うことだろう。

しかしながら、伊勢物語の本文、南北朝期までに成立した和歌集・物語を見ても、なおなぜこの人物がこの小段の「女」と考えられたのか不明である人物もいる。それは②染殿后⑥長谷雄御妹⑧筑紫染川女⑩仲平女⑬ましこの前の五名である。特に②染殿后は「知頭集」「冷泉抄」ともに業平の妻とし、かなりの段に実名が宛てられるがその根拠が不明である。他の女性はいずれも「知頭集」「冷泉抄」において実名が挙げられている小段が少ない。⑥長谷雄御妹は「恋死にの女」として実名が挙げられ、「知頭集」の45段と「冷泉抄」の冒頭の人名のみに載る。⑧筑紫染川女は、「知頭集」は「名なし」として実名は挙げない。「冷泉抄」は定文妹とするが、両方とも61段のみである。⑩仲平女は養妹とされるが、「知頭集」では40



段のみに実名が宛てられる。「冷泉抄」では登場しない。⑩ましこの前は、「知頭集」では62段のみに実名が宛てられる。冷泉抄には登場しない。「冷泉抄」に実名が宛てられていない人物は、いずれも「知頭集」でも実名が宛てられる小段の少ない人物であると言える。

## 五 まとめ

以上のことから、古注釈が各小段の人物に実名を宛てる方法は、少なくとも他の和歌集・物語に実名があてられているかどうかを参考として宛てたというものではなさそうである。では、どのような方法で実名を宛てたのが次に問題となる。その小段と似た状況設定を持つ小段・物語・和歌集などに宛てられる実名から、このような恋をする女は誰であろうと推定して実名を宛てて行ったのではなからうか。

伊勢物語自体が、ある小段から派生した物語も含んで成長した事については、片桐洋一氏が、

新しく表現された「仮相」によって、作者や享受者の意識の中に存する「実相」もまた拡大するというわけである。「伊勢物語」の中に、既に存在している章段の後日譚・派生譚と解される段が多いのは、まさしくそのせいであると言つてよい。

と述べておられる。

伊勢物語の中に一つの物語から派生した話があるように、古注釈においても、一つの小段に注釈を加える事によって、それにふさわしいと注釈者が考える人物の名前が宛てられ、それが注釈者の物語の捉え方によって変化してきた。そしてその変化の中で、「知頭集」「冷泉抄」の冒頭に挙げられる「十二人」の女性の性格や、業平の「妻」としての位置付けも変わってきた。例えば五条后は、最初はいくつかの小段において妻と考えられて

いたが、師匠から弟子への講釈が繰り返されて行く過程においてだんだん宛てられる小段が少なくなつて行き、やがて冒頭の部分にその痕跡を残す形になつたのである。また「知頭集」「冷泉抄」ともに、伊勢を抜き出してましこの前に変えたとする説を採用する。「知頭集」の冒頭が書かれた時点で同書には伊勢が書き換えたとされる話がやはり十六段あつたと考えるのが自然である。これもだんだんに減つて行つたのだらう。これと同様に、「知頭集」で述べられる業平が事実まじえて書いたとする「昔」の物語も、注釈が繰り返される過程で消えていったものである。それに対して、二条后などは、身分の高い人への恋などの主題を持つ小段の女性を集約するような形で、実名が宛てられることが増えていったものであると考えられる。この小段の人物の捉え方の変化により、宛てられる実名は変化し、それが新たなその人物の理解を生んで行つた。伊勢物語に描かれた「女」とされる十二人の人名が「知頭集」と「冷泉抄」で一致しているのは、おそらくはある段階まではこれら二つの注釈が同一の系統の注釈であつたためであらう。宛てられる人物の実名が変化し、全く実名が宛てられない人物がいるのにも関わらず、「冷泉抄」の冒頭の部分の人名が訂正されるのがなかつたのは、師匠から弟子への教授が小段ごとに行われ、全体を一度に行う性質のものでなかつたため、それが気づかれないうか、あるいは問題とされなかつたためであらう。

この小段の捉え方によって実名を宛てるという事が伊勢物語の古注釈の人物比定の方法であり、そしてこの方法により、宛てられた人物に対する新たな説話が作られ、あるいはすでにあつた説話が否定・もしくは忘れられていったと考えられるのである。これが古注釈の人物比定の方法であるとするれば、古注釈相互の成立年代比較は、その人物・小段に関する捉え方について、どちらの方が古い説である可能性が強いとは言える。

しても、全体を通してどちらの古注釈が先に成立したかということ述べ  
る事は極めて困難であるとせざるを得ないであろう。古注釈の本文研究  
は、このような古注釈の本文流動の原則を踏まえた上で、その一つ一つの  
小段にまつわる話の成立の先後関係の把握から始める必要があるだろう。

【注】

- 1 『伊勢物語の研究〔資料篇〕』所収 片桐洋一 明治書院 昭和四四年一月発行  
同注1所収
- 2 『伊勢物語の研究〔研究篇〕』 片桐洋一 明治書院 昭和四三年二月発行 五  
三二頁
- 3 『伊勢物語の研究〔研究篇〕』 片桐洋一 明治書院 昭和四三年二月発行 五  
三二頁
- 4 『伊勢物語の新研究』 片桐洋一 明治書院 昭和六二年九月発行 六〇頁  
同注3 四九一―四九二頁
- 5 同注1 一一〇頁下段
- 6 同注1 一一〇頁上・下段
- 7 同注1 一一〇頁上・下段
- 8 同注1 二八九頁上・下段
- 9 この部分の調査は、拙稿『伊勢物語古注釈に登場する人物―「伊勢物語」中の  
「男」「女」には誰の名があてられたか』（『福山国文学』 第一七号 平成五年  
三月発行 四九―九八頁）による。
- 10 同注1 一〇五頁上段
- 11 同注1 一〇五頁下段
- 12 同注1 一〇六頁下段―一〇七頁下段
- 13 同注1 一〇七頁下段
- 14 同注1 一〇八頁上段
- 15 同注1 二九〇頁下段
- 16 『竹取物語 伊勢物語 大和物語』（阪倉篤義 大津有一 築島裕 阿部俊子  
今井源衛校注 日本古典文学大系9 岩波書店 昭和三二年一〇月発行）所収  
の伊勢物語頭注に挙げられた出典により分類した。本稿の伊勢物語・大和物語  
の引用は全て同書による。頁数は断らなかつた。
- 17 同注16所収の伊勢物語により分類を行った。
- 18 『古今和歌六帖』第二 一三〇五番 『新編国歌大観』 第二卷 私撰集編  
歌集 新編国歌大観編集委員会 昭和五九年三月発行 二二二頁上段
- 19 『古今和歌六帖』第六 四二五五番 同注18 二二二頁中段
- 20 『古今和歌集』 小島憲之 新井栄蔵校注 新日本古典文学大系5 岩波書店  
平成元年二月発行 二四三頁 なお本稿における古今和歌集の歌番号及び引用  
は全て同書によつた。頁数は断らなかつた。

- 21 同注1 三六〇頁下段
- 22 同注16 三三〇―三三一頁
- 23 同注16 三三三―三三四頁
- 24 『宝物集』 統群書類従 第三二輯下 雑部 統群書類従完成会 大正一三年  
八月発行 二九三頁
- 25 『西公談抄』 新校群書類従 第一三卷 内外書籍株式会社 昭和四年一月  
発行 五〇七頁
- 26 同注1 一七四頁上段
- 27 同注1 三六三頁下段―三六四頁上段
- 28 『伊勢物語に就きての研究 校本篇』 池田亀鑑著 有精堂 昭和三三年三月  
発行 一七二―一八一頁
- 29 『伊勢物語校本と研究』 山田清市著 昭和五二年一〇月発行 一七〇―一七  
八頁
- 30 同注16 三〇四頁
- 31 『古今和歌集』 小沢正夫校注・訳 日本古典文学全集7 小学館 昭和四六  
年四月発行 五〇一頁
- 32 同注4 六四頁

付記

本稿は平成一〇年九月一九日開催の筑波大学国語国文学会において発表させて頂い  
たものを基としました。当日御助言を頂きました小西甚一先生、犬井善寿先生、萩  
原昌好先生、名波弘彰先生、谷口孝介先生に心より感謝致します。

(いづか えりと 福山女学園大学 文化情報学部 助教授)